

論文の内容の要旨

論文題目：The Conservation of Modernist Standardized Design: the Vocational Education Project in 1965-1970

学位申請者： Abhichartvorapan Waeovichian

キーワード：モダニズム建築、モダニズム建築の保存、職業教育学校、坂倉準三、DOCOMOMO

本研究は、1965年から1970年までに日本人建築家坂倉準三(1901-69)が主宰する坂倉準三建築研究所によって、タイ国全土20地区25か所にわたって建設された、タイ国文部省職業教育学校施設(以下職業教育学校)の現状の使われ方および建物の保存状況についてヒアリングを中心とした現地調査を行い、東京上野にある文化庁近現代建築資料館に保存されている原設計図ならびに関連資料と、当時タイに派遣された設計スタッフへのヒアリングをもとに、職業教育学校の建築的価値を明らかに、保存・再生に向けての問題点とその指針を提示することを目的とする。

建設されてから約50年が経過し、その期間、建物の機能(使い方)や物理的な変更や修復が行われているが、幾つかの事例には、そのオリジナルの建築的特徴すなわちオーセンティシティを無視した改修が見られる。2016年に、この職業教育学校のうち4つのプロジェクトが「保存すべき建物」として、王立タイ建築家協会(ASA)によって認定された。このことは、これらの近代建築群が専門家だけでなく一般にとっても保存すべき価値を有することを示している。

1920年代からヨーロッパを中心として、それまでの歴史的要素を主とした様式建築とは異なった、合理的、機能的な側面を重視したいわゆるモダニズム建築(近代建築)が建てられるようになった。日本においても本論文の主体である坂倉準三をはじめ、1930年代からヨーロッパの建築家のもとで働いた経験を有する建築家たちによってモダニズム建築が現れ、第二次世界大戦後、1960年代の高度経済成長を背景にそのピークを迎えた。しかしながら、それらの建築が建てて50年を過ぎた1980年代後半から、多くのモダニズム建築がその建築的価値を十分検討しないままに取り壊されることになり、2000年になってもその動きは国際的に加速していく様相を呈している。そのような20世紀における建築環境の破壊に対して、その文化的価値を検討し、それらを保

存・再生・再利用していく国際組織 DOCOMOMO (Documentation and Conservation of Buildings, Sites and Neighbourhoods of the Modern Movement モダン・ムーブメントに関わる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織) が設立され、2000年の日本支部の設立をはじめアジア諸国にも広がり、2014年にはタイ支部が設立された。このようなアジアにおけるモダニズム建築に焦点を当てた記録調査と保存・再生の流れが、本研究の着手に極めて大きな動機となっている。

また、日本と同様に伝統文化に長い歴史があるタイにおいて、寺院建築を中心としたいわゆる歴史的建築遺産に対する保存と修復に関しては、その社会的なコンセンサスは確立されているものの、まだ歴史の浅い、すなわち時間の経過が短いモダニズム建築の保存・再生に対する意識は、専門家を含めて極めて低く、その登録ならびに保存制度も十分でないのが現状である。本研究によって、世界的にもその評価が高い日本人建築家である坂倉準三の設計による職業教育学校の特質をタイにおける近代建築史の流れに位置づけながら、その建築的価値を措定し、DOCOMOMO を中心としたこれまで行われてきた、マドリッド・ドキュメント (2014 年) など、保存・再生に対する思想的、技術的問題点に対する議論を踏まえながら、保存・再生に対する指針を提示することで、モダニズム建築における文化的継承をタイに促す一助になると考える。

本論文は6章で構成されており、以下各章ごとの概略を示す。

第1章は、序論として、本論の目的ならび研究背景、本論の章構成と根拠とした史料とデータの分類を行い、論証をする上での方法論を提示することによって、その妥当性を述べ、既往研究の内容を分析することで本研究の学術的意義を明確にした。

第2章は、モダニズム建築遺産として DOCOMOMO を中心としたモダニズム建築の遺産としての西洋諸国とアジア諸国における動きを明確にすることで、アジアにおけるモダニズム建築遺産における問題点との共通性と相違点を抽出した。

第3章は、タイのモダニズム建築保存に対する現状として、タイにおいてモダニズム建築の保存や登録を行っている組織の活動の詳細と、それらの活動が直面している問題点を、歴史記念物を扱っている組織との比較を通して浮き彫りにし、モダニズム建築に対してどのような登録制度や法規制が必要なのかを考察した。

第4章は、1965年-1970年タイ国職業教育学校施設の建築的価値として、設計者である坂倉準三の本計画以前の活動ならびに彼が実務設計を学び、最も影響を受けたとされるフランス人建築家ル・コルビュジエ (1887-1965) のモダニズム建築の思想や技術的特質がどのようなものであったのかを考察した。次に職業教育学校の計画が始まった理由とその時代背景、さらに設計者の選定経緯などを明らかにし、坂倉が考える職業教育学校がいかなるものであったのかを指摘した。続いて25か所の学校を教育プログラムご

とに分類し、それらに対応する建築形態・構造技術・設備技術・生産工法が標準化という共通の手法を使いながらいかに実現していったのかを考察し、その建築的価値がいかなるものであったのかを明らかにした。

第5章は、ケーススタディとしての建物現状調査における分析として、25か所のうち比較的オリジナルの建築形態を残している13か所を取り上げ、竣工当時からのどのような変化があり、現在の状態を確認しながら、管理者であり建物をユーザーへのインタビューから保存に対する意識を調査し、その問題点を分析した。

第6章では、本論文の結論を述べるとともに、ケーススタディで取り上げた職業訓練学校の保存・再生・再利用のための提案を行った。

以上述べた通り、1950年代以降に世界中で建てられたモダニズム建築は、その耐用年数や自然災害・防災等の理由により、20世紀における普遍的、固有的な文化的・建築的価値が有するにもかかわらず、世界中において解体の危機に面している。しかしながら、本研究で取り上げたタイにおける坂倉準三の設計による職業教育学校施設は、20世紀における普遍的ならびにタイ固有の気候風土に即した文化的・建築的価値すなわち建築計画、構造設備計画ならびに生産工法における標準化と空間の可変性への対応、さらには省エネルギー効率が活かせる環境的価値を有していることがわかった。これらの分析を基に職業教育学校のこれからの在り方について、使用目的すなわち機能の変更、構造・設備技術の改変・更新、校舎施設の増築に対して何を残し、何を改変すれば良いのかという物理的な指針と、DOCOMOMO Thailand などを通じた情報交換を行いながら、ユーザーを含めた一般のモダニズム建築を使い続けるための意識の変革のための理念的指針を提示することができた。